
FAIRY RAVE ~十戒の剣を持つ少女~

鱗斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY RAVE 十戒の剣を持つ少女

【Nコード】

N5211Y

【作者名】

鱗斗

【あらすじ】

多大な知識と十戒の剣を持つ少女、リンは、火竜を探す為に乗った列車の中で乗り合わせたある少年と出会う。そして、その出会いはやがて、物語を狂わせる事になる。

01・十戒の少女 巻（前書き）

RAVEを読んでみて作中の武器がFAIRYTAILの世界に出
てきたら面白そうという安易な理由で書きました。
後悔はしていない。

01・十戒の少女 壱

少女、リンはハルジオンという街に行く列車に乗っていた。

しかし、その体調は思わしく無く、ガタン、ゴトンと車体が揺れるたび、脳味噌までもが揺れているように感じている。

元々、乗り物に強い体質という訳ではないのだが、今回は少し場所が悪かった。

友人が泣いていると、思わずもらい泣きしてしまうように、彼女の後ろの席では、時には辛そうに息をあげていたり、時には嘔吐したりと、しているうちに、彼女もどうやら気分が悪くなったらしい。

「はぁ……窓でも開けようかな」

そう思い、彼女は膝に置いていた愛剣デジコン・コンテナメンーTCMと呼ばれる剣を前の空席に置き、窓を開ける。スライド式のドアは開けづらいのだ。

ようやく開いた窓から、湿度の高い夏の風が入り込む。

再び愛剣を膝に置いたその時だった。

リンの目の前がいきなり真っ青になったのだ。

「うわっ？なにになに？」

後ろに飛び退く勢いだったが、生憎彼女は座っていたため、後頭部がシートに直撃してしまった。

「つつ〜」

「大丈夫？」

リンは、頭を押さえつつ、心配の声に答えようとする。

「うん……大丈夫、だと思う」

血とか出てないかなー、と思いつつ、リンは声のした方向ー先ほどまで自分の愛剣を置いていた目の前の席の方へと顔を上げる。すると、目の前に居たのは猫だった。

「え、猫？猫が、喋った？」

「あい」

「いや、あい、じゃなくて……」

しかも、この猫の毛は青色。どうも、先程の視界の青化はこの猫の所為らしい。

「うるさいぞ、ハッピー。頭に、ひび……ウプ」

この猫ーハッピーの飼い主らしき人物は、どうやらリンのすぐ後ろの、乗り物にもものすごく弱い人物のようだった。

「って、今ウプって言わなかった？今、エチケット袋出すから待って……」

時、既に遅し。

駅員がやってきて、掃除をし終える頃に、ようやくハルジオンの街に着いたのだった。

「あ……あの……お客様……だ……大丈夫ですか？」

駅員は、ぐったりとしている少年の姿を見て問いかける。

猫は、そんな彼の代わりに答えた。

「あい。いつもの事なので」

「無理？もう二度と列車には乗らん……うぶ」

本日何回目の嘔吐だろう。と思いつつ、リンは、電車を降りる。ついでに、一緒に降りて来たハッピーという猫に、一つ質問をした。

「そういえばさ、何で貴方、私の席に来たの？」

別にこの猫の所為という訳では無いのだが、リンは一応頭を打った身なのだ。

「あい。ナツがこんな状態だったから代わりに窓を開けて欲しかったのです」

オイラ、そんなに力無いしね。と言いながら、ハッピーは答えた。

「ふーん」

リンがそう相槌を打ったと同時に、休憩をしていたというナツという少年を乗せたまま、電車は出発した。

「た〜す〜け〜て〜」

ナツの悲痛な叫び声がこだまする。

「あゝあ、出発しちゃった。……って、さっきの猫は？」

さっきまで隣に居たはずのハッピーが、いない。

出発した列車の方へと目を向けると、なんと羽を生やしたハッピーが、ナツの下へと飛んで行っていた。

「羽が生える……確か、翼キウラって魔法だった」

旅をする前に学んだ大量の知識の中から取り出した魔法の知識。それは、かつて、歩く図書館と呼ばれた彼女にとっては、大きな硝子玉のちいさな破片のような知識だ。

すぐに、ハッピーはナツを掴みながら戻ってきた。

「……てゆーか、ナツを持てる位の力あるなら窓位開けられたんじゃない？」

「ーハツ？」

「気づくの遅すぎ？」

そんな漫才のような会話を続けている内に、少年ナツが復活した。

「おし！もう大丈夫だ、ハッピー」

それを聞き、ナツを降ろすハッピー。腕が疲れたらしく、腕が少しプルプルと震えていた。

「噂によると、この町に火竜サラマンダーがいるハズだよ。行こ」

「火竜サラマンダー、ってあの炎を使う魔導士のこと？」

「っ！お前、イグニールを知ってるのか？」

「イグニール……？かどろかは知らないけど、私も火竜サラマンダーを探してるんだ。顔も名前も知らないけどね。アナタ達も火竜サラマンダーを追ってるの？」

まるで火竜サラマンダーの正体を知っているようなナツの口振りに、質問せざるを得なかったリン。正体を知っている人物と行動した方が合理的と考えたからだ。

「あい」

「おう！」

「そっかーじゃあさ、私も着いて行っていいかな？」

「構わねえよ」

「あい」

「……軽っ」

非常にあっさりとして、リンは彼らと共に火竜を探しに行くことになった。

01・十戒の少女 壱（後書き）

あれ、なんか見た事ある奴がいるぞ？

そうです、リンは作者が非公開にした小説「転生妖精物語」に登場したキャラです。

でも基本的に名前だけ一緒の完全別人。

あれです、ジークハルトとジェラルムみたいなもの。

いずれ他キャラもだせたらなあ……意外と人気の高かったラウルとか……

01・十戒の少女 弐(前書き)

第一話第二部です。

前話のシメ方が酷かったのはこういう訳です。

まあ、シメ方が上手く行った事は無いんですが。

01・十戒の少女 式

「きゃー！火竜様よー？」
サラマンダー

「この街に来るなんて？夢見たい！」

「こっちむいてー」

目をハートにして、という表現がまるで当てはまるような目をした少女達が、火竜と呼ばれる男の下へとかけて行く。

「しかし……すごい人気だねー、どれだけ凄い魔導士なんだろ……」
駅を出て、ナツとハッピーとリンはハルジオンの市街地へとや
つてきた。

そこで、この街に火竜がやってきているという噂を聞いたのだ。

「ねえ、ナツ。火竜ってさあ……ってエエ？」
サラマンダー

見ればナツまでもが少女達と同じようなー否、彼女達よりも、
ずっと輝いていて、純粋な眼差しを、火竜へと向けていた。
サラマンダー

「イグニールウウウウ？？」

時速はマッハ数を到達しているのではないかと思う程のスピー
ドで、火竜へと走り出すナツ。
サラマンダー

「速っ！待ってよ、ナツ？」
だけど。

それだけ、ナツはイグニールの事を慕っているという事なのか
な、と思いつながら、リンはナツを追いかける。

しかし、その時だった。

「（アレはー？）」
サラマンダー

彼のー火竜と呼ばれる男の腕には、彼女も見た事のある、あ
る魔法が装備されていた。

「（あの魔法は――魅了^{チャーム}？だとしたら、あの女の子達は……）」
魅了、されている。偽りの感情に、流されてしまっている。
「こうしちゃ……いられないっ？」

彼女の持つ剣がその形を変える。
その瞬間、彼女の走るスピードは、先のナツを超えるスピード
だった。

リンはナツよりも一足速く一火竜の下へとたどり着き、魅了さ
れてしまっている少女達を飛び越えた。

剣は再び形を変える。

そして、その刀身を、彼の腕へと向ける。

「な、何だ君は？」

「――封印の剣――！」
ルーンセイブ

腕が、奪られた。
サラムンダー
火竜と呼ばれる男は、そう確信していた。
しかし、彼女の剣が自分の腕を通過しても、いつまで経っても
痛みが来ない。

「ー別に」

少女が、口を開く。

「別に、人を殺すつもりは無いんだ。でも、人の心を操作するって
いう行為自体が気に入らない。これがあの火竜の本性……極端とい
える評価の本質だとしたらー幻滅だよね」

こんな生意気な少女、^{ガキ} 魅了^{チャーム}させれば良い。

そう思い、彼は結局斬られなかった右手を突き出し、^{チャーム} 魅了を発
動させる。

しかし、

「無駄だよ。それはもう、壊れてるから」

「んなっ？」

それは、やがてバラバラと崩れおちる。

つまりー彼女が斬ったのは、腕では無く、魔法だけ。

だが。

いくら^{チャーム} 魅了が壊されようと、彼が^{サラムンダー} 火竜たらしめている、魔法を
見せれば、こんなガキ、一瞬で片が付く。

魔法が解けた少女達は逃げ出したが、今度は力で屈服させれば

いい。

余裕の表情で次に彼が繰り出したのは、炎。

「妖精の尻尾の火竜フェアリーテイルって言えば分かるか？つまり、お前なんかには敵わない男って事だね？」

「っ！ーへえ、そりゃ敵わないね。流石火竜サラマンダー。炎の魔法はお得意って事だね」

「ほざけ、ガキがあっ??？」

彼の炎がリンの身体を焼き尽くす。

跡に残るのは、無残な灰だけ。

誰が見ても、そう確信するような光景だった。

しかし。

「ーきゃっ……」

炎が彼女の身体にあたる直前で、リンは何かを押されて、横に飛んだ。

リンはすぐに、自分が元居た場所を見る。

「ーナツ??？」

そこにいたのは、ナツだった。

炎に面と向かって立ち向かうナツに、リンは思わず叫んだのだ。

「大丈夫だよ、君。ナツに、炎は効かない」

気がつくと、隣にはハッピーが居た。

その表情は、自身に満ち溢れていた。

01 ギルドへ

「不味イ」

ナツは、炎の中でそう言い放った。

「炎の中で生きて、炎を食べている……?」

リンは、その光景を見て、戦慄していた。

「な、何だ……?」

サラマンダー火竜は、何が起こっているのか、理解が出来なかった。

そして。

『ナツに炎は聞かない』

ハッピーが言った事は本当だった。



聞いたことがある。

太古より存在し、自らの身体を竜の体質へと変換させる魔法。
そして、それを扱う魔導士の存在。

ドラゴンスレイヤー
滅竜魔導士の噂を。

そして、その魔導士は、サラマンダー火竜と呼ばれている事を。

「（もしかしてーナツが……）」

「（ナツが、あの滅竜魔導士？）」

「それに、お前、フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士だって言ってたなあ」
気がついたら、炎は全て食い尽くされ、ナツの姿ははっきりと見えていた。

そして、両手に炎を纏わせていた。
一歩一歩、ゆっくりと歩いて行き、そして、サラマンダー似非火竜の目の前まで辿り着く。

そしてー？

「オレはフェアリーテイル妖精の尻尾のナツだ？ テメエなんか、見た事無え？」

顔を、殴った。

それと同時に、ナツの上着は脱げ、その右肩には、妖精を模した刺青のようなものーフェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士である証が、刻まれて

いた。

「チツ、逃げられたか」

ナツが留めの一発を殴ろうとして、腕を構えた一瞬に、炎に乗って偽火竜は逃げて行った。

「いやー……充分殴ってたと思うけど……」

計五発。

あんなに力を込めたパンチを五発も喰らって気絶しなかった方も凄い。

「いや、まだたんねえ。アイツは妖精の尻尾フェアリーテイルの名を騙ったんだ？今度会ったら七発じゃ済まさねえ？」

五発です。七発じゃ多分死んでます、はい。

「（それにしても……ナツが火竜サラマンダーだったとはね……しかも妖精フェアリーテイルの尻尾イルの魔導士、か）」

「あ、あのー……」
「ん？」

声のした方を見ると、金髪の少女がそこに居た。
恐らく、魅了チャームの影響を受けてしまった少女の一人だろう。

「さつきは、ありがとね。それと、アナタ達、妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士でしょ？」

「いや、私は違うよ。あっちのナツ……と多分ハッピーっていう猫がそう。私はただの旅人」

そう言つて、私はふと、下の方に視線を下げる。少女の腰には鍵の束がぶら下がっていた。

「……ふうん、その鍵ゲート、門の鍵、か。ひょっとして、妖精フェアリーテイルの尻尾イルに入りたいの？」

「うん！妖精フェアリーテイルの尻尾イルつて、すごい魔導士がいっぱい居て……。ああ、もつと強い魔法とか覚えなきゃならないのかな〜！」

「はははっ、アナタ面白いね！！妖精フェアリーテイルの尻尾イルかぁ……。私も入りたくなつたよ」

「じゃあ着いて来るか？これから帰るつもりだったんだ」

「火竜サラマンダーの噂もガセだったしね」

気がつくくと、ナツとハッピーが話に加わってきた。

「ホント！！行く行く？」

「私も」

「おし？決定だな」

「あい？」

「でも、確か妖精フェアリーテイルの尻尾のある街ってマグノリアだよな？それじゃ、ここから帰るには電車使わないと行けないんじゃない？」

「あ」

ハッピーが思い出したように口を開く。

「い、いやだ~~~~~?」

ナツの叫びが、こだました。

01・ギルドへ(後書き)

とゆーわけで第一話終了。

やっぱシメ方がなっていないな、とおもっております。

早速第二話を、と思いますが、インターバルとしてキャラ紹介やら
偽火竜のその後についてをやるうとも考えています。

意外と物語に関わってくるので、お楽しみに？

閑話 火竜のその後（前書き）

お久しぶりです。

今回は、閑話という事で、偽火竜のその後について書きました。

600文字前後の相変わらずのチラ裏クオリティですが、一応、重要な話です。600文字って凄い。

閑話 火竜のその後

「くそつ、あのガキどもめ？」
サラマンダー
プロミネンス
火竜ーもとい、紅天のボラは、部下の居る船へ戻ろうと、とにかくにげていた。本物の火竜が現れたのだ。もう、ハルジオンの街に、彼の居場所は無い。

しかし。

「あの女どもを逃したのは惜しいが……まあ良い。奴隷まだまだ腐る程いる」

あの女ども、とは先ほど魅了チャームの魔法を使い、船へ連れ込もうとした女性達の事だろう。

「ふふ、船が見えてきた……最後に勝つのは、俺なんだ

……よ……」

船が、無い。

否、正確には、船はある。しかし、それは、まるで台風にでもあつたかのように、壊されていた。

ボラは、大急ぎで船へむかう。

しかし、いや、やはり。

港の周りは木片が舞い散り、血肉ー人間のものだ。それがあちこちに散らばっていた。海の方を見ると、ぶよぶよとしたクラゲのような何かが、浮かんでいた。

それは、かつての船員である男たちの死体だった。

うっ、と、ボラは喉の奥から湧き起こる、不快感を吐き出した。

「はあ、はあ……一体、誰が……」

そうだ、女は。

ボラは、女を探す。

女さえー奴隷さえいれば良いのだ、それさえあればー

「無駄だよー女の子達は皆開放した。君の仲間は今全員海の底、もしくは、そこらへんで挽き肉になっているよ」

「な、」

何者だ、お前、と言えなかった。

その前に、彼の首は、文字通り切られていたのだから。

「これで、全員だね……」

男は、血肉飛び散る港を後にする。掃除などしている余裕は無いのだ。

「早く、会わなきゃな……」

彼は、暗闇に包まれた道を当てもなく歩き続ける。

そして、とある少女の名前を、呟く。

「リンー」

閑話 火竜のその後（後書き）

蛇足なのかもしれませんが、一応、今後の話に重要になってくる話になります。

久々に書いたから600文字が非常に長く感じました。

またインターバルが空きますが、今後ともよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5211y/>

FAIRY RAVE ~十戒の剣を持つ少女~

2011年12月17日10時48分発行